

【書評】葉山博子著『南洋標本館』

—海域アジア・オセアニア研究の視点から読み解く

河野 正治

葉山博子

『南洋標本館』

早川書房、2025年

本書は、作家である葉山博子の2冊目の著作である。アガサ・クリスティー賞大賞を受賞した前作の『時の睡蓮を摘みに』（2023年、早川書房）に続いて、戦前における植民地統治や戦争の運命にさらされながらも生きる人間のドラマを描いた作品である。著者が紡ぐ物語の完成度の高さについてはすでに多数の書評で絶賛されているが、それを支えるのが日本や台湾を中心とする戦前・戦中の歴史への深い理解であることに疑いはない。

扱っている時代と地域こそ戦前から戦中・戦後に至る海域アジア・オセアニア世界であるが、あくまでも小説であり、伝記的事実や史実とは異なる創作的な描写も多数登場する。それでもなお、この作品は植民地統治や戦争の経験のみならず、海域アジア・オセアニア世界における「地続き」のような「海続き」の交流〔cf. 秋道編 1998〕とそれにもとづく諸個人の複雑な経験を、読者に想像させる喚起力を十分に備えている。

本書評では、そのような海域アジア・オセアニア研究の視点から『南洋標本館』が描く世界の一端を紐解いてみたい。

物語の主人公は、台湾の「本島人」である陳永豊（タン・イェンホン）と、台北生まれの「内地人」である生田琴司（いくた・きんじ）である。小説自体は、いつか南洋植物の標本館を作りたいという二人の青年の約束を基底として展開する。植物採集への情熱自体には政治的要素が希薄なものの、陳と琴司は帝国日本をめぐる当時の政治状況に否応なく巻き込まれていく。

二人の青年の生き方を文脈づけるのは、帝国日本において統治者と被統治者の間に明確に存在していた序列である。陳と琴司が出会った総督府高等学校尋常科では、内地人から本島人への日常的な蔑視があった。そうした非対称な関係性のなかで、陳は植物学者になる夢

を抱きつつも、本島人と内地人の間に存在していた壁を乗り越える期待を背負わされ、内地の帝国大学に進学して医者になるというレールを周囲から敷かれた。一方、陳とは異なる形であったが、台湾生まれの内地人である琴司の生き方も内地と台湾の序列に規定されていた。琴司は、内地生まれの内地人との比較に苛まれ、内地の帝国大学に進学せよという周囲の圧力に晒されながらも、台湾に根を張って生きることを選び取った。同じ内地人であっても台湾生まれと内地生まれの間には暗黙の序列が存在しており、植物学者として台湾にとどまることを選んだ琴司のもとに持ち込まれた縁談は、後に妻となる病弱な澄恵のみであった。琴司は内地人でありながら、内地と台湾という序列のなかで生きていかざるを得なかったのである。

このような背景を視野に入れるならば、陳と琴司が抱いた南洋の植物学者という夢は、純粹な学問的情熱であると同時に、内地と台湾をめぐる日常の政治に対する反転としての非政治的な夢であったと解釈できるだろう。

そのような非政治的な夢を叶えるための交通インフラ自体、帝国日本という政治的文脈と切り離せない。琴司が植物採集を行ったのは、日本による占領下の広東や海南島を除けば、横浜から小笠原諸島を経てマリアナ諸島やカロリン諸島へと至る航路に沿った島々であり、戦前の帝国日本が南洋群島として統治したミクロネシアと本州をつなぐ航路にはかならない。他方、陳が植物採集を実質的な目的として訪問していたのは、戦線の拡大とともに帝国日本のフロンティアとなったニューギニアやインドネシアであった。琴司が帝国日本の領土の内部で、陳が帝国日本の領土拡大の前線で、それぞれ植物採集を行ったという違いはあるものの、二人の植物採集を支えたのは帝国日本という枠組みによって可能となる移動であったのだ。

こうした帝国日本における南方への移動・移住を追跡することは、戦前に京城・大連・パラオに滞在した中島敦（1909～1942年）の越境経験を引き合いに拙稿で論じたように「アジアとオセアニアを移動・横断する行為者の複雑な経験に迫る」ことであり、「国民国家とは異なる地理的な想像力を掻き立てる」ことにつながる[河野 2023:7; cf. 小谷 2019]。

ただし、本書ではそれ以上に、本来は非政治的であるはずの植物採集という学問的探究が帝国日本における統治経験と戦争の発生という政治的な出来事とのかかわりを深めるなかで、主人公が次第に内面的な葛藤を孕むようになる過程が描かれる。

陳の民族アイデンティティは出生の地点から複雑さを帯びている。陳は福建人の父と台湾原住民の母の間に「劉偉（ラウ・ウィ）」として生まれながらも、父が日本人警官に連行

され処刑されるという過去を持つ。その後、陳は、対日協力を契機に富豪になった陳家に引き取られ「陳永豊」として生きることとなる。先述した「本島人と内地人の間に存在していた壁を乗り越える期待」とは、この時期に陳の義父となった陳永勝（タン・イェンシュン）が陳に夢見ていたものにほかならない。陳永勝自身、内地人に対して従順な素振りを見せながら、自身の手掛ける台湾製糖業を本島人の手に取り戻すことを目標としており、彼自身内地人と本島人の狭間で生きていかざるを得なかったのである。

義父を病気で亡くし、日本の財閥に陳家の事業と財産を接収された後、陳は台北帝国大学の教授のもとで植物学者として台湾で生きることとなる。しかし、その歩みにおいて、本島人であることを理由に論文を査読に落とされたり、実父である劉文照（ラウ・ブンチャウ）が台湾民主国の武官として日本と戦ったという来歴を聞かされたり、東京帝国大学在籍時に知り合った福建人から日中戦争が迫る状況での抗日戦線への誘いの手紙を受け取ったりしているうちに、陳は日本国籍を有しながらも福建人にルーツを持つという両義的な属性に自身のアイデンティティを引き裂かれそうになる。

陳は、太平洋戦争の戦線の拡大とともに、陸軍嘱託技師としてインドネシアのジャワ島に渡り、その身分の限りにおいて植物学者としての活動を継続することになるが、当局からの暗黙の要請により「永山豊吉（ながやま・とよきち）」という日本名への改名を余儀なくされる。陳は永山という日本人としての振る舞いを内面化しながらも、帝国日本下におけるジャワの住民を自身のルーツである台湾の本島人と重ね合わせる。彼は日本名を名乗りながらも、日本側が進める農業政策の失敗を予期し、何世代にもわたりジャワの地に根付いてきた農民の知恵を称揚する。その一方で、陳は、スカルノら独立運動の指導者に近い立場にあるラトゥナとの恋に際しては、独立運動の足枷になる華僑華人と同じルーツにあることを隠すために、日本人として振る舞い続けた。陳はここでも自己分裂するのである。

太平洋戦争が終結すると、陳も含む全ての本島人は日本国籍を喪失し、中華民国籍に編入された。だが、陳は本島人でありながらも日本統治下の知識人であった来歴から、国府から狙われ香港への亡命を余儀なくされる。他方、琴司は「日本人」として引き揚げなければならず、生まれ育って以来 37 年間過ごした台湾を離れ九州に移住し、植物学者としての歩み続けることになる。

このように、本書では二人の主人公が内地人と本島人という二重のアイデンティティを抱えながら移動や移住を重ね、それぞれの地点において内面的葛藤を繰り返す様子が描写される。こうして引き裂かれた自己アイデンティティに、わずかな救いが見出せるとしたら、

陳の香港亡命時における「植物学者だったきみは、誰の借り物でもない、きみ自身だったじゃないか」（本書 p. 493）という琴司の台詞と、陳が日本でも台湾でもない北米という第三の地で植物学者として成功を収め、華僑三世の妻と家族を形成したというエピソードであろう。

以上のように、本書は南洋の植物学者の夢という題材を通して、単一民族神話とは異なる「多民族国家」としての帝国日本における移動・移住とそれに伴う越境経験、そして複雑なルーツをもつ自己の内面的葛藤を描いた作品である。戦後 80 年という節目の年に出版された本書は、現代の日本人にとって「忘れられた島々」[井上 2015]とも形容される戦前・戦中の海域アジア・オセアニア世界がいかなる世界であり、その世界で複雑なルーツをもつ個人がどのように自己形成をしていたのかを鮮明に描き出す点に作品としての価値がある。

とりわけ、本書の意義は、海域アジア・オセアニア世界の「海続き」の交流がフロンティア精神によって支えられる肯定的側面ばかりではなく、自己アイデンティティをめぐる葛藤を伴う越境経験という負の側面を持ちうることを、小説という形態で伝える点である。具体的には、台湾における「内地人」と「本島人」という区別を起点としながら、帝国日本における階層的な民族構成とそれに伴う内面的葛藤の問題を、主人公の生きざまに迫りながら浮き彫りにする点である。帝国日本における統治経験に関する研究[今泉 2023: 261-262]では、戦前の南洋群島（ミクロネシア）においても「一等国民（内地人）」・「二等国民（沖縄・朝鮮半島出身者）」・「三等国民（ミクロネシア島民）」という暗黙の序列が存在していたことが指摘されており、台湾以外の舞台でも同様の経験や生き方を描ける可能性は十分にある。

本書の巻末には、多数の学術文献が挙げられているほか、方言指導や、国立台湾大学植物標本館での見学、同館の館長への聞き取りに対する謝辞が述べられている。著者によるこうした丹念な文献調査と取材こそが、史実とは異なる創作部分を含みながらも、二人の主人公の生きざまに迫るようなリアリティと質感をもった読書体験を可能にしているといえよう。

本書は小説であり、主な読者として想定されているのは一般層であろう。だが、オセアニア・東アジア・東南アジアについて学び研究する者こそ、本書を通じて喚起される戦前・戦中の海域アジア・オセアニア世界の物語に触れるべきである。現代の海域アジア・オセアニア世界の底流に「忘れられた島々」としての歴史があることを、本書の鮮烈な読書体験を通じて、より実感を持って批判的に理解することができるはずである。

参考文献

秋道智彌編 1998『海人の世界』同文館。

井上 亮 2015『忘れられた島々——「南洋群島」の現代史』平凡社。

今泉裕美子 2023「太平洋分割のなかの日本の南洋群島統治——委任統治と「島民」の創出」
中野聡・安村直己編、棚橋訓編集協力『岩波講座 世界歴史 19 太平洋海域世界 ～二
〇世紀』岩波書店、pp. 229-245。

河野正治 2023「フロンティアとしての島嶼世界——海域アジア・オセアニア研究のための
予備的検討」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』135 : 1-10.

小谷汪之 2019『中島敦の朝鮮と南洋』岩波書店。

(かわの・まさはる 東京都立大学)